

SEMICON Japan TECH CAMP

群馬大学大学院 電子情報部門

小林研究室所属 荒船拓也

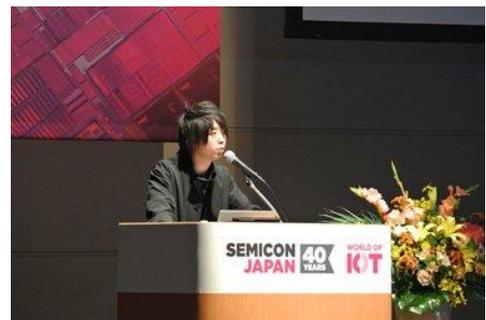
【概要】

今回 SEMICON Japan 40 周年記念事業として「MIRAI GAKKO」が開催された。その中で私は「TECH CAMP」というプログラムに参加したので報告する。12/14~16 の3日間に渡って開催された本プログラムは主にセミナーと Hackathon で構成されており、若手社員の交流に重きを置いたプログラムであった。

【セミナー】

● オープンキーノート

オープンキーノートでは 筑波大学助教授 デジタルネイチャー研究室主宰 兼 メディアアーティスト の落合陽一先生の講演が行われた。落合先生は人間と自然、デジタルリソースが継ぎ目なくつながり合う世界観「デジタルネイチャー」を提唱する研究者である。超音波で物体を空中に浮かせて三次元制御する「三次元音響浮揚」やフェムト秒レーザー技術を用いた「触れるホログラム」などを研究している。どの研究も革新的で興味深い内容であった。



講演の後に、先生とお話しする機会があった。その時に「バカになって発想し、プロとして実行する」という言葉が最も印象に残った。おそらく、新しい「モノ」を生み出す技術者として、空想的に想像し理論的に実行していくことが重要という意味だと思う。実際に落合先生の研究は「モノの空中浮遊」や「触感のある触れる映像」など最近まで空想的な話であった技術を多く研究している。これは落合先生が常識に捉われない人であると同時に、技術力も兼ね備えているからである。



であろう。この言葉は落合先生自身を表現しており、日々新しい技術を開発している技術者にとって必要な言葉だと感じた。技術者としての腕を持ちながら、固定概念に捉われない自由な発想を持つ落合先生のような人こそが今後の次世代イノベーションを支えていけるのかもしれない。

【Hackathon】

ハッカソンとは1つのテーマに対して1つの空間に集められた参加者たちがチームを組みアイデアを出し合ったり、意見交換したりし、短時間でテーマに沿ったサービスや技術を提案する。最終的には壇上で数分間のプレゼンをし、チームごとの提案を発表形式で共有するといった新しいアイデア創出を目的としたグループディスカッションのようなものである。

今回は半導体製造に関わる (SEMICON 出展) 企業の若手社員が集められ「2020年、東京オリンピックを言語や文化の違いを超えて興奮を分かち合うために、科学技術は何が出来るのか?」というテーマに沿って3日間の議論を行った。この議論の中で私は利便性や新規性に焦点を当てて提案していた一方で、社会人はコスト面や製造方法等、実現性に焦点を当てていた。さらに使用者の立場になって技術を考えており、実際に製品にしたときのビジョンま

で描いていた。提案技術のニーズやどのように実現するかを考えることも技術者として大切だと感じ、学生と社会人の着眼点の違いを感じた。自分にはない視点での見解があり、チームメンバーからは多くを学ばせてもらった。社会人になるに当たって自分に必要な視点や考え方を分析できた。しかし、私のチームの議論では提案と実現性を同時に考えてしまったため、独創性の高いアイデアがあまり生まれなかった。提案の段階で実現性を考慮してしまうと、それが自然と新しいアイデア創出の妨げになってしまうのではないかと感じた。以前同じ形式で他大学の学生たちとチームを組み、発表をしたことがあるが、その際は実現性を考慮しなかった分、様々なアイデアを積極的に出し合うことができた。これらの経験から提案の段階では実現性は考えず、提案が固まってから実現性を考えるとクリエイティブなモノができると感じた。ここでも落合先生がおっしゃっていた「バカになって発想し、プロとして実行する」という言葉が頭を過った。熟練の技術者ほど物事を理論的、現実的に捉えがちである。しかし、そのような技術者ほど素人になって発想することが必要なのではないかと、固定概念に捉われない発想が重要なのではないかと感じた。無理難題を実行し、それをどこまで実現性の高い「モノ」に落とせるかがエンジニア

としての腕の見せ所であり、提案段階からロジカルな思考にならなくても良い。その点、実現性やニーズに捉われない学生の自由な発想力は社会に出ても忘れてはいけないエンジニアとしての重要なファクターだと感じた。私は社会に出て「素人の想像力と玄人の創造力を兼ね備えた技術者」を目指していきたい。

最終日のプレゼンではトークを重視した発表が最も印象的であった。視覚情報を最低限に抑え、聴覚に訴えることで、聴講者の想像力を見事にかきたてていた。また、一部動画を用いた発表もあり、映像だけでなく音声も使い、パフォーマンス性の高い発表も目立っていた。ここ数年は研究成果を発表することが多く、図やグラフに重きを置き、視覚を重視したスライドを作成してきた。しかし、自分たちの提案を売り込むプレゼンでは聴覚も使用すると聴講者が惹きつけられるようだ。社会に出るに当たって報告としてのプレゼン能力だけでなく魅せるプレゼン能力も身に付けたいと強く感じた。

【感想】

今回、若手社員のプログラムに参加し、社会人と学生の考え方や着眼点の違いから自分に必要な能力や考え方を見出す良い機会となった。社会に出る前に残りの学生生活で自由な発想力を磨いていけるよう日々研究に勤しんでいきたい。今後もこのような機会があれば積極的に参加し、自分のブラッシュアップに繋げていこうと思う。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった小林春夫教授に深く感謝申し上げます。また、本プログラム参加を支援してくださった石川信宣技官に感謝申し上げます。

【写真出典元】

https://twitter.com/semicon_jpn/media

